

2022. 11. 13 (日) 使徒5 : 33 ~ 42

5:33 これを聞いて、彼らは怒り狂い、使徒たちを殺そうと考えた。

5:34 ところが、民全体に尊敬されている律法の教師で、ガマリエルというパリサイ人が議場に立ち、使徒たちをしばらく外に出すように命じ、

5:35 それから議員たちに向かってこう言った。「イスラエルの皆さん、この者たちをどう扱うか、よく気をつけてください。

5:36 先ごろテウダが立ち上がって、自分を何か偉い者のように言い、彼に従った男の数が四百人ほどになりました。しかし彼は殺され、従った者たちはみな散らされて、跡形もなくなりました。

5:37 彼の後、住民登録の時に、ガリラヤ人のユダが立ち上がり、民をそそのかして反乱を起こしましたが、彼も滅び、彼に従った者たちもみな散らされてしまいました。

5:38 そこで今、私はあなたがたに申し上げたい。この者たちから手を引き、放っておきなさい。もしその計画や行動が人間から出たものなら、自滅するでしょう。

5:39 しかし、もしそれが神から出たものなら、彼らを滅ぼすことはできないでしょう。もしかすると、あなたがたは神に敵対する者になってしまいます。」議員たちは彼の意見に従い、

5:40 使徒たちを呼び入れて、むちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと命じたうえで、釈放した。

5:41 使徒たちは、御名のために辱められるに値する者とされたことを喜びながら、最高法院から出て行った。

5:42 そして毎日、宮や家々でイエスがキリストであると教え、宣べ伝えることをやめなかった。

<説教>

先主日には、ユダヤ人の最高法院（サンヘドリン）での大祭司による使徒たちへの尋問（5:27-28）とそれに対する使徒たちの答え（29-32）を聞きました。「人に従うより、神に従うべきです。」これが使徒たちの確固とした信仰であり、その力強い告白でした。「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」（使徒 1:8）、これが主イエス・キリストの約束のみことばでした。ですから、いくら最高法院で、またその議長である大祭司以下権威ある人間から「イエスの名によって人々に語ることも教えることもしてはならない。」と厳しく命じられても、その命令に聞き従うことはできませんでした。同時にイエスのみことばとみわざを聞き、見、また知っていながらイエスを約束のメシヤ（キリスト）と認めず信じないで、ねたみ、イエスを十字架につけるように画策し、民衆を指導した大祭司たちの罪、責任をも使徒たちは恐れることなく指摘しました。それはイエスを信じて、悔い改め（神に立ち返り）、罪の赦しを神から受けるようにとの説教であり、勧めでもありました。このとき使徒たちが語ったこと（29-32）は、内容としては、彼らがこれまでに語り、教えてきたことでした。ペンテコステのときの使徒ペテロの説教（2章）も、生まれつき足の不自由な人をイエスの名によって癒やした後の神殿での説教

(3章)も、そして最初の逮捕のときに最高法院で語ったこと(4章)もそうでした。そして、2章、3章で見たように、ペテロたちの説教を聞いた民衆の中からは、心を刺され、イエスをキリストと信じて悔い改め、罪赦され救われた人々が多く起こされたのでした。

さて、では最高法院の議員として権威、権力を行使していた大祭司たち(サドカイ人)や律法学者たち(パリサイ人)はどうだったのでしょうか。〈これを聞いて、彼らは怒り狂い、使徒たちを殺そうと考えた。〉(5:33)のです。「怒り狂う」とは「心を(のこぎりで)引き切られる」(欄外注)ような怒りですからこれは非常な怒りでした。それは、「人に従うより、神に従うべきです。」と言って自分たちの命令に反抗し、従わない者に対する怒りだったことは間違いありません。彼らも自分たちは誰よりも唯一真の神を信じていると自認し誇ってもいたでしょう。だから「人に従うより、神に従うべきです。」と言われたら、「なるほど、その通りだ。」と考えるのが当然のような気がします。しかし実際にはそうではありませんでした。なぜだったのでしょうか。それはやはり使徒たちが自分たち(大祭司たち)の命令に頑として従わなかったからでしょう。いくら「神に従う」ためだとしても(そして結局どんな理由であれ)、自分の言うことに従わない者に対して人は怒るものです。少なくともむっとしたりいらっとします。ましてやその従わない人間が自分の権威の下にある者、また自分より「格下」だと見ている場合、その怒りはいや増すでしょう。最初の逮捕、取り調べのとき(4章)以降、そのいらいら、怒りが積み重なっていたのでしょう。〈大祭司とその仲間たち〉というユダヤ人の中での最高の権威者だと自認していた者たちにとっては、民衆は自分たちの言うことを何でも聞いて従って当たり前、反抗するなどけしからんことでした。ましてや「あなたがたはイエスを殺し、神に敵対している」と罪を指摘して責めるとか、説教して悔い改めを迫るなどもつてのほかでした。そうやって自分たちのメンツがひどくつぶされたと思って怒り狂ったのです。また使徒たちが相変わらず「神はイエスよみがえらせた」と言ってイエスの復活を主張したことが大祭司たちサドカイ人たちを怒り狂わせました。「死人の復活はない」と言うサドカイ人たちが、〈イエスを例にあげて死者の中からの復活を宣べ伝えている〉ペテロとヨハネに苛立ったことがそもそも最初の迫害の始まりでした(4章)。「あなたがたががねたみ、神にのろわれた者として殺したナザレのイエスを神がよみがえらせ、天の神の権力の座に着かせ、あなたがたの導き手、救い主となさったのだ。」という使徒たちの、聖霊によって語られた証し(証言)が最高法院(特に大祭司たち、サドカイ人たち)には全く受け入れられませんでした。反対に「怒髪(どはつ)天を衝(つ)く」というべきこれまで以上の大きな怒りを引き起こし、ついに使徒たちを死刑にしようとする寸前にまで至ったのです。それは大祭司たちの頑なな心、罪ゆえのことでした。

ところがここに一人の〈パリサイ人〉が登場します。それは〈民全体に尊敬されている律法の教師〉であるガマリエルという人です(34)。〈パリサイ人〉たちはサドカイ人たちのような世襲の上流階級ではなく、いわば庶民派であり、律法を学び守る厳格さで人々の尊敬を得ていました(その中の「律法主義」はイエスから厳しく責められました)。ガマリエルはその中でも最も偉大な先生として尊敬されていたようです。その人が当時よく知られていた二つの事件を引き合いに出して、議会の決定しようとしたことに待ったをかけました。結果、〈議員たちは彼の意見に従い〉(39)、死刑判決とはなりません。ではガマリエルは本当の意味で神のみこころにかなう線で議会を説得したのかと言えばそ

うではありません。結論的に言えば妥協的であり、使徒たちが主張したのと同じ「人に従うより、神に従う」選択ではありませんでした。何故なら、ガマリエルを含めて最高法院は使徒たちを〈むちで打ち〉罰し、〈辱め〉(41)しました。そして「イエスの名によって語ってはならない」と再び使徒たちに命じた(これこそ一番してはならなかった)からです。ガマリエルが説得の例として挙げた事件の首謀者は、〈テウダ〉にせよ〈ユダ〉にせよ「妄想家」「権力への反逆者」であり、結局〈殺され〉〈滅び〉ました。もちろん彼らはその後復活などしていません。しかし、ガマリエルはこれをイエスに当てはめたわけです。「神はあなたがたが木にかけて殺したイエスをよみがえらせました。」「神はこのイエスを導き手、また救い主としてご自分の右に上げられました。」と語った使徒たちの証言を全く無視し、受け入れませんでした。ですから、「神に敵対する者になる」かもしれないという恐れ(それだけ見れば、確かに正しいものかもしれませんが)を律法学者なりに示しつつ、しかし「人(この場合まさにガマリエルたちのことです)に従うより、神に従うべきです。」とは決して言いませんでした。彼も神の御前にはイエスに敵対する者(ルカ 11:23)でした。

そんな中で、使徒たちは〈喜びながら〉出て行き、イエスの名によって語り教えることをやめず、ますます熱心に大胆に続けました(41-42)。「わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。」(マタイ 5:11-12)とのイエスのみことばを使徒たちは思い起こしてもいたに違いありません。

先に見た大祭司たちサドカイ人たちのようなあからさまで激しい怒りや拒絶、またパリサイ人ガマリエルのような穏やかではあるが結局は拒絶に至る、そのような人々の反応は私たちがイエスの名のゆえに、イエスの十字架の死と復活を証しするときによく受けるものです。肉の思いには嫌なものですが、そこで私たちのために苦難を耐え忍ばれたイエスがともにいてくださることを覚えて、恥じることなく、神に従っていきたいと願います。